

# Sharing Nature Life

自然に暮らす

遊んで、  
学んで、  
楽しんで!

シェアリングネイチャーライフ

2015  
VOL.

10

秋

## 子どもという 自然 “森のようちえん”にみる おとなの居方

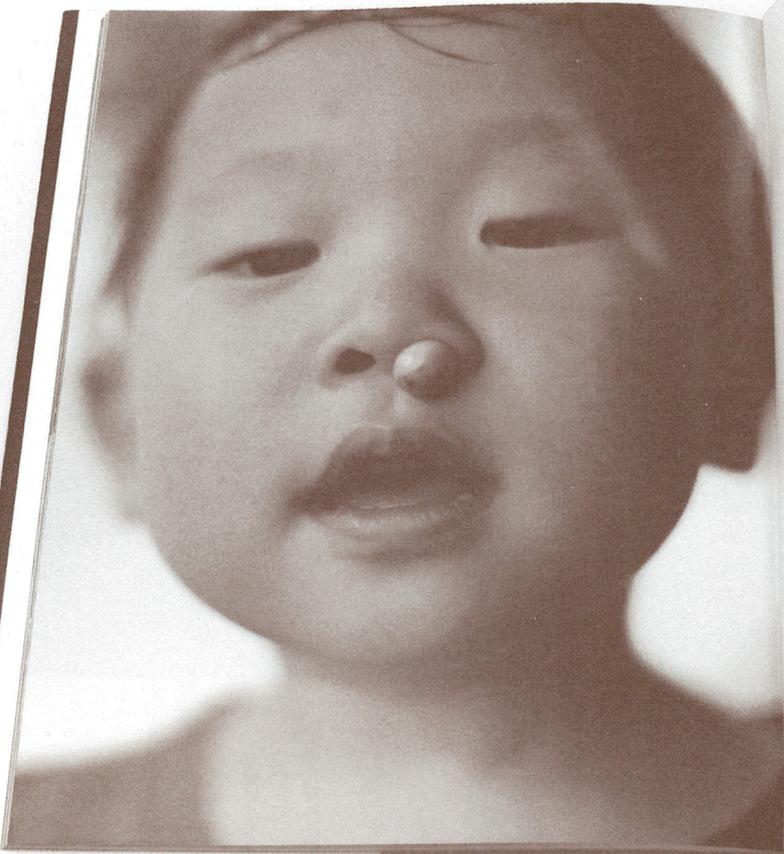
<http://www.naturegame.or.jp/>



自然に寄りそう 未来につなぐ  
公益社団法人  
日本シェアリングネイチャー協会



スポーツ振興くじ助成事業



大人が  
クスツと  
笑っちゃうほどに

子どもは  
子どもを  
生きています

出典・引用『子どもは子どもを生きています』  
写真・ことば/小西貴士 発行/フレーベル館

“森のようちえん”にみる  
おとなの居方

# 森の生きものとして

# 子どもとの時間

森と子どもを見つめる  
【写真家】  
【森の案内人】  
小西貴士さん



八ヶ岳南麓、標高 1,400 mの清里高原で森と子どもをテーマに写真を撮る。日本写真家協会会員。公益財団法人キープ協会・清里聖ヨハネ保育園森の保育担当。

思わずクスツと笑ったり、ときには吹き出したり  
そして胸がキュンと熱くなる。

小西貴士さんの写真に写る子どもたちを見ていると  
今まさにそこで動いているように感じられ

そして森は、多くの命を抱えて確実にそこに在る…のです。  
そんな彼の視線に惹かれて、清里の森を訪ねてみました。

雨上がりの清里の森。野外で思い思い

に遊ぶ子どもたちを見ると、世紀の大発見をしたかのような真剣なまなざし  
で地面の穴をつついていたり、小さいながら一所懸命友だちの世話を焼いていた  
り、じつに自由で独創的です。

もしかしたら、都市生活のなかで「危  
ないから」「汚いから」「周りの人にうる

さいとしかられそうだから」…と気づか

ぬうちに蓋をしているかもしれない。子ども  
の素の行動の向うにある表情。それを  
久しぶりにじっくりと味わったよう  
な…そんな時間が流れます。

ここは公益財団法人キープ協会が運営  
する清里聖ヨハネ保育園。最近ではあち  
らこちらで聞かれるようになった、「森

インタビュー/編集部・伊東久枝  
文/伊東久枝





【特集】  
「子ども」という自然  
…“森のようちえん”にみる おとなの居方

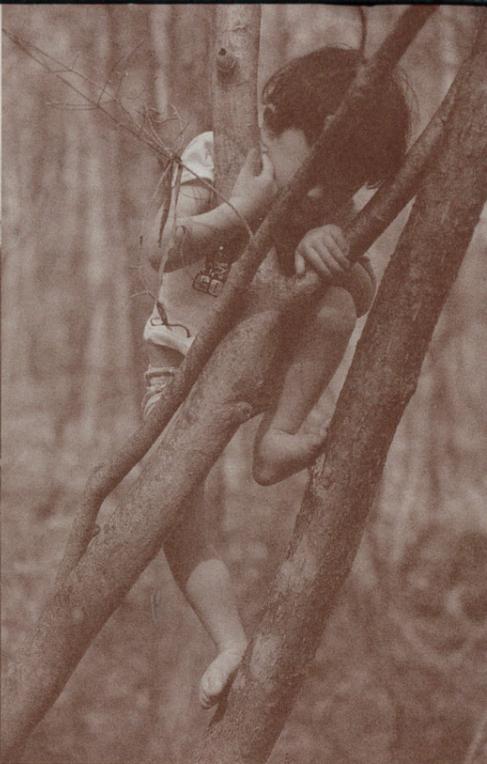
ちいざな人の器いっぱい、  
無条件の優しさを注ぐ人が  
必要



5歳の確かなイメージを持たなきゃ、  
5歳の美しさが埋もれちゃう



何の変哲もない雪玉ひとつが、  
その子にとって宝物になります



木登りを「見る」とか  
「撮る」というのも  
その子への応援のひとつ



撮っていていいのか、  
助けにゆくのか、  
判断はいつも一瞬だよ

小さな人たちは、見れば見るほど「自然」。  
「人の自然」がいちばん素直に出てくる存在…。

夢中の遊びには、  
数値化できない  
豊かさがあるよね

のようちえん』のひとつです。雨の日も雪の日も子どもたちは森へ出かけ、1日の大半を自然のなかで過ごします。

「命」のことは、よく観察しているとその面白さが見えてくると思うんです。小さな人たちは当然ながら「未熟で足りない」のだけれど、それを育てなきゃ、補わなきゃ、としか思えなかったら、私たち大人が小さな人たちとともに暮らす毎日って、なんてつまらなくなってしまうだろうと思うんです」

そう話すのは、森と子どもの写真に多くのファンを持つ、写真家・小西貴士さん。彼のブログ『ゴリの森のようちえん日記』をのぞくと、その言葉を裏付けるかのように躍動感あふれる子どもたちの写真と、彼らを愛おしく見つめる小西さんの言葉が並びます。これらの写真と文章は、『子どもは子どもを生きています』（フレーベル館）などの写真集となつて、すでに書店でも手に取ることが出来ます。

しかし、小西さんが写真を自らの活動の中心としたのはごく最近。もともとは自然学校でインタープリター（自然ガイド）をしていました。今も『森のようちえん』の活動に関わり、多く子どもたちは森で、死んだシカやノネズミにも出逢います。もちろん躍動するシカや生まれたばかりのノネズミの赤ちゃんにも…。そのどちらにも出逢って子どもたち一人ひとりのなかで「シカ」や「ノネズミ」という命の感覚がつけられてゆくのだらうと、小西さん。

「自然である」ことは、素敵さでもあるし、厳しさでもあるし、切なさや優しさや愛おしさでもある…。『命』というものも自然であるならば、その自然さに敏感でありたい。ぼく個人の願いだけにとられるのではなく、目の前の命のリアリティに敏感でありたいんです」

### 命の幅にあふれる「森」

「森は、命の幅を、命そのものの可能性を認めやすいというか、認めざるを得ない場所なんだと思います。だから、教育も絶対的より相対的な方へと流れやすい。一人ひとりの子どもがもつ「命の自然性」を、態度として認めやすくなつていくような気がします」

森を歩いていると、周りがまだ青々とした緑の葉を繁らせているのに、1枚だけ先に紅く染まっている葉があったり、逆に冬枯れの森にいつまでも紅葉を見せ

の時間を子どもたちとともに森で過ごしています。

### 「子どもが生きる」というリアリティを伝えたい

「こんなふうに育ってほしい」だけではなく、「こんなふうに育ってゆくんだ」に惹かれている姿勢。それは森との付き合い方や写真が教えてくれたことでもあると、小西さんはいいます。

「写真とガイドの仕事は似ていて、どちらも「対象ありき」なんです。命がそこで輝いていることを肯定できないと、撮れないし伝えられない」

森でタンポポの綿毛が飛び瞬間を狙っているとき、最後の1本がふわりと離れる絵を思い描いていると、強風が吹いて種はパタリと倒れてしまう…。自然のなかではそんなことの連続。でも、それが命のリアリティであり愛おしさではないかというのです。

「自然は、ぼくたちが望んでいる通りにすべてがうまくゆくわけではないですよ。トンボの羽化に立ち会っていても、ぼくの願いとは離れて、羽化の最中に強風が吹かれて池に落ちてしまうものもある。じゃあ、その命はダメだったかというところではない。そうやってしまったことまで含めて愛おしく思える感覚が、命の輝きを知ることなんだろうと思うんです」

続ける葉があったり…。自然のそういう幅を知っているの、子どもたちの幅も認めやすくなっているのではないか。これは小西さんの自己分析。一人だけ他の子と違う行動を取っても、特別なこととしてではなく認められるのだらうと…。

そして、「小さな人たちがこそが、物ごとを肯定的に捉える天才」だといいます。虫喰いがたくさんある葉をおもしろがったり、今そこに起こっていることに素直に興味を示す。葉の機能を考えたら虫などに喰われないほうがいいはず、などとは考えることなどせず…。

### 「本当に危ないこと」と「危ないこと」は違う

「小さな人たちが森に行くとおもしろいんですよ。そして、小さな人たちは、見れば見るほど「自然」です。人という命が本来持っている自然「がもつとも見えやすい存在だ」と思います」

自然であることを認める…といつても、危険なところでも子どもたちを自由にさせていいということではありません。ただ、「本当に危ないこと」と「危ないこと」は違うというのです。

どこでどんな

暮らしをしていても

「暮らす」感覚が

確かな人がいい。

秋、気温が下がってきたころ、  
熟れたヤマボウシに必死にかじりついているスズメバチの様子を子どもたちと一緒に観ることは、スズメバチの毒針の危険性を伝えることと同じくとても大切なことです。そういう「命としてのスズメバチ」の感覚に気づいてこそ「共存」の感覚に気づけるのではないのでしょうか

何が危険なのかを見極めることは本当に難しい。けれど、簡単に「危険」だと線引きをしても、人として育つ可能性を奪ってしまうのは違う。だから、「日悩みながらあきらめずにやっていくしかない」のだと、小西さん。

「子どもの集団と安全に暮らしてゆくためには、ある程度のラインを引いて、『ここまでしようね』と伝えなければならぬ」と小西さん。それは現実で



写真・写真のことば／小西貴士

でも、その制限のなかでスムーズに過ごすことが「命を育む」ということにおいて最善かという点、そうではないのも事実なのです。子どもっておとなが困るようなことをして、最高の笑顔をみせたりしますよね。命の花を美しく咲かせたいと願うのなら、ときには、大人には都合の悪いことでもできる環境で、しっかり人としての根を張ることを認めてほしいんです」

小西さんの「子どもの側に居る大人たち」への願いです。

「人であるという自然」と想えば、いろいろが見えてくる感覚がうれしい

### 「無償の愛」が存在する社会を

「現在は『暮らし』よりも上位に『経済』がくる社会。これは、命の在り方としては、やはりゆがんだ社会だと思う」という小西さん。ただし、単純に昔の生活に戻ればいいのかと考えているわけでもないとも。

「どこでどういう暮らしをしても、『暮らし』感覚を確かに持ち、仕事や政策に反映できるような人になつてほしいんです」

田舎で暮らしていると、近所のお年寄りが野菜や卵など自分たちが育てたものをよく分けてくれるのだそうです。かと思えば、小西さんが育てたものも遠慮なく持って行ってしまいうこともあって、びっくりだとか。

でも、最近「人が人らしくある社会」というのは、育てたり採ったりした食物を分けあいながら、共感や共存の文化を引



新刊本

『子どもがひとり笑ったら...』

写真・ことば／小西貴士

こんな風に子どもに接することができれば、もっと毎日がやさしく、そして子どもが愛おしくなる...と思わせる一冊。子どもの側にいる大人たちへ。フレーベル館発行／1,600円＋税

### 小西さんより こどものとも『みてみて!』を プレゼント

読者アンケートに答えていただいた方の中から抽選で2名の方にプレゼントいたします。詳しくは、本誌P.10をご覧ください。



き継いでゆく社会ではないか」と考えるのだそうです。自分が一生懸命に働いて得たものを、自分の子どもでもでもない子に分け与えることができる「無償の愛」が存在する社会。そして、それが成り立つのは「自分もそうして育った記憶があるから」ではないかと。

「この文化をどうしたら引き継げるんでしょうね」という小西さんの問いに、彼の撮った子どもたちの写真を見ながら「きつと今、子どもたちに寄りそう大人の在り方にヒントがあるんだろう」と思った、清里でのインタビューでした。

ちいさな人の中に  
人としての自然性を  
見出して暮らす

小西貴士

私の  
シェアリング  
ネイチャー